

# ゴードンの機能的健康パターンを用いた看護学生の アセスメントの特徴と看護実践への影響

高橋奈津子\*、佐藤 幹代\*、長瀬 雅子\*、小島 善和\*、藤村 龍子\*、雄西智恵美\*\*

## Assessment Tendency and Effect on Nursing Care of Nursing Students using Functional Health Pattern

Natsuko Takahashi, Mikiyo Sato, Masako Nagase, Yoshikazu Kojima, Ryuko Fujimura Chiemi Onishi

臨地実習におけるゴードンの機能的健康パターンを用いた看護学生の初期アセスメントの特徴、看護実践への影響を明らかにすることを目的に成人看護学実習中の看護学生（3年生）10名に面接調査を実施した。学生は、ゴードンの枠組みにそった情報収集と枠組みにとられない情報収集を行っており、〈自己認識／自己概念〉などの心理社会的パターンは、患者との関係性、定義、概念の難しさ、解釈の多様性のため、学生にとって難しいパターンであった。ゴードンの機能的健康パターンは、全体的存在としての人間理解の視点を提示していたが、さらに臨床判断プロセスを促進するフォーマットの工夫、病態生理の理解を促進する工夫が必要なことが示唆された。

key words : ゴードンの機能的健康パターン、看護学生、臨地実習、アセスメント

### I はじめに

看護過程におけるアセスメントは、看護の方向性と質を決定する重要な局面である。更に、ある枠組みでアセスメントをすすめることは、系統的かつ包括的な対象のとらえ方を可能にするものであり、看護の実践的思考の基礎形成のためにも基礎教育課程においては重要な教育内容である。本学の成人看護学領域では、看護過程学習用フォーマットとして、データベースアセスメント用紙、アセスメントの統合用紙、重点アセスメント用紙、看護計画用紙、日々の看護活動の記録用紙を使用し、データベースアセスメントの枠組みとして「ゴードンの11の機能的健康パターン」を一部修正(価値-信念を自己認識/自己概念に組み入れ、感染防御を追加)した枠組みを採用している。ゴードンの機能的健康パターンとは、人間の機能に着目した看護アセスメントの枠組みである。看護の対象は、発達段階、健康レベル、生活レベルなど様々

であるが、ゴードンは、看護介入の質の保証、向上にむけ、看護が取り扱う問題(看護診断)を共通化するために、初期アセスメントについてある程度共通した形式が使用できるのではないかとこの観点から様々なアセスメントツールを分析し、11の機能的健康パターンを見いだした。この11の機能的健康パターンは、行動(生物的、心理的、社会的、霊的なものも含めて)をより高度のレベルにまとめたものである。本学成人看護学領域にて、この枠組みを選択した理由として、意志決定能力があり、自立した生活者を系統的かつ包括的に理解しやすいこと、急性期、慢性期のあらゆる健康レベルに適用しやすいこと、本学成人看護学の看護アプローチである全体的存在としての人間、セルフケアなどの基本概念となじみやすいと考えたためである。そして成人看護学実習にむけて、成人看護学概論にて、ゴードンの機能的健康パターンの定義・アセスメントの視点を学習し、急性期看護論、慢性期看護論にて看護過程の事例演習を行っている。しかし、初学者にとってアセスメントの段階は臨床実習の中でも戸惑いの高い学習の1つとなっていることが報告されており、著者らの調査でも学生が「目の前の現象にしか目がいかない」ことや「言語的情報の意味の分析

\* 東海大学 健康科学部 看護学科

\*\* 徳島大学 医学部 保健学科

表1 ゴードンの機能的健康パターンを活用した  
データベースアセスメントの枠組み

1. フェースシート	2. 検査所見・治療状況
3. 項目別アセスメント	
1)健康認識／健康管理	2)栄養／代謝
3)感染防御	4)排泄
5)活動／運動	6)知覚－認知
7)睡眠／休息	8)自己認識／自己概念
9)役割／関係	10)性／生殖
11)ストレス－コーピング	(価値／信念の一部は8)へ)

が難しい」「アセスメントの時間の不足」などからアセスメントの難しさを実感していることが明らかとなった。(江川他、2000)。このようにアセスメントの難しさに対する戸惑いを軽減し、臨地実習の場で看護過程の展開を実践するために、本研究では、1) 実習における学生の初期アセスメントの特徴、2) ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護実践への影響を明らかにすることを目的とした。

## II 研究方法

### 1. 研究対象

成人看護学実習中の看護学生（3年生）で調査に同意の得られた10名。

### 2. データ収集方法

1) 情報収集、2) 項目別アセスメント、3) 項目別アセスメントの統合、4) 重点アセスメントから看護上の問題／看護診断確定までの初期アセスメントの特徴とゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護実践への影響についてインタビューガイドを作成し、面接調査を実施し、学生が語った内容を面接中および終了後に記載した。

### 3. データ分析方法

記載された内容から、1) 情報収集、2) 項目別アセスメント、3) 項目別アセスメントの統合、4) 重点アセスメントから看護上の問題／看護診断確定までの初期アセスメントの特徴とゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護実践への影響を示す内容を抽出し、コード化、カテゴリー化した。

### 4. データ収集期間

2002年10月～12月

### 5. 倫理的配慮

学生に調査目的と方法を文書で説明すると共に、調査協力は自由意志であること、調査への同意の有無が成績に関係しないことなどを説明する。その後同意の署名をもらった。

## III 結果

本学の成人看護学でのゴードンの機能的健康パターンを活用したデータベースアセスメントの枠組み、定義を表1、表2にしめす。

カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは『 』、コードは「 」で示す。

### 1. 初期アセスメントの学生の特徴

#### 1) 情報収集について

情報収集のすすめ方として学生は、『カルテなどの記録類から情報収集したあとで患者から話を聞き』たり、『ゴードンの機能的健康パターンの項目によって情報源を選択する』という記録類や患者との会話からゴードンの【枠組みにそった情報収集】と、患者と普通の会話をすることから信頼関係の形成を優先し、「最初からデータベースをうめるつもりでなく」、「枠組みをあまり意識しない」という【枠組みにとらわれない情報収集】をしていた。

またゴードンの機能的健康のパターンの中で【情報収集の難しいパターン】と【情報収集しやすいパターン】があった。情報収集の難しいパターンとして<自己認識／自己概念>、<役割／関係>、<ストレス－コーピング>、情報収集しやすいパターンとして、<健康認識／健康管理> <栄養／代謝> <排泄>が多くあげられていた。

これには、「カルテに記載がある」といった【既存のデータの有無】、「通常の会話の中でよく出てくる」、「聞いても違和感がない」という【患者から語られることが多い】、【情報収集内容の理解不足】、【患者への聞き方がわからない】、「患者にあまり問題がない」と【情報収集の必要を感じない】、【別のパターンとの情報の重複】、『患者を傷つけるのではないか』『聞いても対処できない』な

表2 本学成人看護学領域で用いるアセスメント項目の定義

アセスメント項目	アセスメント領域
①健康認識／健康管理	健康に対する価値観や健康を阻害しているものや阻害しうものに対する認知の程度とこれらの健康認識に影響を受けている健康管理の方法を査定する。
②栄養／代謝	成長したり生活力を維持するために必要な栄養素および水分の摂取状況と、その充足状況を示す栄養状態や体液バランスの状態を査定する
③感染防御	人間は外界からの様々な侵襲に対する防御機能をもち、局所および全身で反応する。ここでは、生物学的侵襲(微生物による感染)の兆候(防御反応)と、侵略に対する生体の防御能力を査定する
④排泄	排泄は、摂取食物の物質代謝の結果生じる老廃物や有害な生成物を、体外へ排出する生理的反応である。ここでは、排便、排尿、発汗といった具体的な排泄方法から排泄状態を査定する
⑤活動／運動	人間の活動の基本である日常生活活動、運動、余暇活動といった行動を円滑にとるには活動に関わる身体機能が正常に作用していることが必要である。ここでは、活動のあらわれである基本的な生活行動の状況と、身体的活動能力を知るために重要な身体機能を査定する。
⑥知覚－認知	人が内外の状況に適応した行動をとるためには、外的環境と自分自身の状態に関する情報の知識をもつことが重要である。ここでは、その知識を持つ、つまり状況を認知するために必要な能力を査定する。
⑦睡眠／休息	消費されてしまった活動のエネルギーを一新するには、活動を相対的に減少させることが必要であり、そのもつとも明確で代表的な方法が、睡眠と休息である。ここでは、睡眠、休息時の実際の状況とその効果を査定する。
⑧自己認識／自己概念	自分自身に対する認識、つまり自己概念は、その人が自分自身および他者に対する関係の持ち方について与える意味づけによって形成されるものである。自分の性質や能力、衝動、態度といったあらゆるものがその意味づけの対象となるが、個々では自己概念をいくつかの構成要素に分けて査定する
⑨役割／関係	役割とは社会的に(その時その時の立場において)期待される一連の行動のことを指し、そこには他者や所属する集団との関係の持ち方が反映される。ここでは、その人に期待される責務と相互関係の形態にそって役割を査定する。
⑩性／生食	その人の発達段階に照らしあわせた自らの性に対する満足あるいは不満足と、生殖を可能にする生殖能力を査定する。
⑪ストレス－コーピング	人が困難な問題(ストレッサー)に出会ったときにどのように反応するかを、ストレスが生じている状況とその人の個人的・社会的な対処能力から査定する。

表3 情報収集のしやすいパターン・難しいパターンとと思う要因

<p>【既存のデータの有無】                  【患者から語られることが多い】                  【情報収集内容の理解不足】                  【患者への聞き方が分からない】                  【情報収集の必要性を感じない】                  【別パターンとの情報の重複】                  【患者に踏み込むことの躊躇】                  『患者を傷つけるのではないかと思う』                  『聞きにくい内容』                  『聞いても対処できない』                  『信頼関係がないと難しい』                  『プライバシーに関わるため情報の取り扱いが難しい』</p> <p>【】は、カテゴリ、『』は、サブカテゴリ</p>
--

ど【患者に踏み込むことの躊躇】という要因が関係していた。(表3)

2) 項目別アセスメントについて

項目別アセスメントは、ゴードンの機能的健康パターンの項目毎に収集した情報を11のパターン毎に分析する過程である。項目別アセスメントについても、【データ分析の難しいパターン】、【データ分析のしやすいパターン】があった。データ分析の難しいパターンとして〈自己認識／自己概念〉、〈役割／関係〉、〈ストレス－コーピング〉、データ分析のしやすいパターンとして〈健康認識／健康管理〉〈栄養／代謝〉〈活動／運動〉が多くあげられてお

表4 データ分析のしやすい・難しいと思う要因

<p>【問題の存在】                  【情報の量】                  【判断基準の有無】                  『正常・異常で分析できること』                  『解釈の多様性』                  【予測することの困難】</p> <p>【】は、カテゴリ、『』は、サブカテゴリ</p>
--

り、データ収集であげられたパターンと類似していた。これには、「問題のあるパターンはやりやすい」が「問題がない場合、どうアセスメントしたらいいか分からない」という【問題の存在】や、「情報が多く収集できているパターンはやりやすい」という【情報の量】、『正常・異常で分析できること』や心理社会的情報は『解釈の多様性』のため難しいという【判断基準の有無】、「手術後を予測してアセスメントすることが難しい」といった【予測することの困難】という要因が関係していた。(表4)

3) 項目別アセスメントの統合について

項目別アセスメントの統合は、アセスメント統合用紙を用いて、項目別アセスメントの結果から明らかになった手がかり情報を統合し、仮の看護上の問題／看護診断を導き出す過程である。この過程では、学生は、難しか

ったこととして、【項目別アセスメントと問題の関連性】、【情報の要約の仕方】、【書き方が一様でない】ことや、本学では、基礎看護学実習ではヘンダーソンの枠組みを使用しているため、【ヘンダーソンの枠組みとの違い】をあげていた。また良い点として次の過程の【重点アセスメントがやりやすい】、【全体像の把握ができる】、【項目間の関連がわかる】とあげていた。

#### 4) 重点アセスメントについて

重点アセスメントは、仮の看護上の問題／看護診断が確かなものとして確定できるかどうかを検討するために、問題を確定した情報、関連する因子、問題が患者に及ぼす影響を関連図と情報の解釈を記載する。この過程で難しかったこととして、「書き方が分からない」、「どこまで表現したらいいのかわからない」といった【文章化】や、【看護問題のあげ方】、「知識が足りないと書けない」、「症状のメカニズムなどの解釈が難しい」といった【知識不足】、【関連する要因の明確化】、「急性期は、患者の変化が早いので、どの問題をあげればいいのか分からない」という【問題の優先度】、【関連図の書き方】、患者の状態を【予測すること】があげられていた。

## 2. ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護実践への影響

### 1) 対象理解への影響

ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護への影響として対象理解については、「11の機能的健康パターンで全体を関連づけてみるができる」ことや「患者を総合的にとらえることができる」という【全体を関連づけて総合的にみることができる】、【対象理解が深まる】、「その人の個別性に関して情報が多くとれる」という【情報を多くとることができる】、「情報がどのように現象につながるかわかる」、「根拠や意味を考えることができる」という【データの意味・根拠の理解が深まる】、【医学的知識の必要性を認識】していた。

### 2) 看護の方向性への影響

ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護の方向性への影響としては、「項目別アセスメントによりケアの見当がつく」「書いているうちに何をするか方向性が見えた」と【看護の方向性が見えやすくなる】ことや、【個別性がでる】、【看護ケアの根拠がわかる】、【実践につながりやすい】、感染などの合併症予防の必要性から【医学的問題にも関与する】ということがあげら

れていた。

## IV 考 察

### 1. 初期アセスメントの特徴

情報収集については、学生にとって患者との関係性が情報の質に影響するパターンは難しく、逆に検査データや既存の記録が存在するもの、通常の会話で違和感がなく患者から語られることの多いパターンは容易であると考えられる。このように、学生の情報収集は、既存の情報、患者に依存する面が大きい。データ分析については、数値データのように正常、異常の判断基準があるものはアセスメントしやすい傾向にあるが、〈自己認識／自己概念〉などは、定義や概念の理解が難しいこと、患者の言葉や態度などは、分析の視点が分かりにくく、分析・解釈が幾通りも考えられるため、分析に確信がもてず難しく感じると思われる。初期アセスメントは、受け持ち患者と出会って1～2日での情報を活用するため、学生にとって、短時間で信頼関係を形成し、心理社会面のアセスメントを十分に行うことには、限界があると考えられる。そのため、教員、指導者がモデルとなり、患者の言動の意味を共に考え、概念と現象をつなげたり、患者以外からの情報源を提示する必要があると思われる。項目別アセスメントの統合については、問題の関連性、項目間の関係が分かる、全体像の把握ができるとあり、項目別アセスメントの統合は、患者の全体像を理解し、看護上の問題を把握することにつながっていると考えられる。また重点アセスメントについても、看護上の問題を確定するために、関連する因子、問題が患者に及ぼす影響を考えることで、看護上の問題とする根拠を考えるとことや病態生理の知識の必要性を感じる機会になっており、患者の実際の状況と、学内で学習した知識を統合することにつながっていると考えられる。しかし、項目別アセスメントの統合、重点アセスメントについては、書き方、文章化が難しいことがあげられており、学生が臨床判断プロセスをより記載しやすいフォーマットを工夫する必要があると思われる。特に手術をうける患者を対象とする急性期実習では、術後患者の回復過程に学生の学習が追いつかないことも多い。このように学生は、病態や治療関連の知識量が少ないため治療過程にある対象理解には時間がかかり、患者の変化を予測することも難しく臨床現象との時間的なずれも生じやすい。そのため、ゴードンの機能的健康パターンを活用しながら、さらに、臨床判断プロセスを促進するフォーマットの工夫や、治療過程にある人を理解するために病態生理の理解を強調

するための工夫が必要であると考えられる。

## 2. 看護実践への影響

看護実践への影響として、対象理解の深まることあげられており、ゴードンの機能的健康パターンを用いることで、全体的存在としての人間理解の視点を与えることができていると考えられる。

看護の方向性への影響として、個性がでる、実践につながりやすいことがあげられている。これは、ゴードンの11の機能的健康パターンに目を向けることによって情報が多様に収集、分析されるからだと思われる。また学生はゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントにより、データの意味、根拠の理解の深まりや治療過程にある成人患者に対して、医学的知識の必要性を感じている。このようにゴードンの機能的健康パターンにより、学生は、解剖、生理学、病態学などの専門基礎科目の知識の必要性に気づき、看護実践の根拠を考える機会を得ていると考えられる。

## V 結 論

1. ゴードンの機能的健康パターンを用いた看護学生のアセスメントの特徴として、学生はゴードンの枠組みに沿った情報収集と枠組みにとらわれない情報収集を行っていた。また情報収集・分析のしやすいパターン、難しいパターンがあり、特に〈自己認識／自己概念〉などの心理社会的側面に関するパターンは、患者との関係性、定義、概念の難しさ、解釈の多様性のため、学生には難しいパターンととらえられていた。
2. ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントによる看護実践への影響として、学生は全体的存在としての人間理解の視点やデータの意味、ケアの根拠の理解を深めていた。
3. 治療過程にある人の看護過程の展開を実践するためにゴードンの機能的健康パターンを活用しながら、さらに、臨床判断プロセスを促進するフォーマットの工夫や、病態生理の理解を強調するための工夫が必要であると考えられる。

## 文 献

- 江川隆子(2001):「成人看護学」における看護診断の指導の試み、大阪大学看護学雑誌、7(1)、4-14.
- 江川幸二ほか(2001):看護学生の臨床実習における戸惑いとその要因、東海大学健康科学部紀要、7、1-8.
- 金賀律子ほか(2000):V.ヘンダーソンの看護論と推理過程モデルを用いたアセスメントのための実習記録の検討、25(13)、97-103.
- 北川さなえほか(2002):基礎看護学実習における学生の思考過程と教授方法に関する一考察看護診断における活動-運動パターンのアセスメント段階の分析より、東京構成年金看護専門学校紀要4(1)、37-40.
- 黒田裕子ほか(2001):看護基礎教育カリキュラムへの看護診断の取り入れに関する調査、看護診断、6(1)、112-119.
- Marjory Gordon、佐藤重美(1998):ゴードン博士のよくわかる機能的健康パターン、照林社.
- 三吉里香ほか(2000):看護実習における「看護アセスメント学実習」とその意義、大分看護科学研究2(1)、8-15.
- 任和子ほか(2001):看護基礎教育における臨床実習の新しい方法-アセスメントに焦点をあてた週1回の実習の試み-、日本看護医療学会雑誌、3(1)、23-29.
- 大村いづみほか(2000):母性看護学実習における産褥期データベースの検討-ゴードンの機能的健康パターンを用いて-、愛知母性衛生学会、18、57-67.
- 鈴木のり子、高木文子(2002):臨地実習での看護診断過程における学生の困難とその原因、日本看護学教育学会誌、12(1)、11-17.
- 戸田由美子、越智百枝(2002):精神看護学実習における学生の患者理解の過程-情報収集・アセスメントの分析より-、香川医科大学看護学雑誌6(1)、169-178.
- 山口求ほか(2001):看護過程のアセスメント能力の評価、看護展望、26(5)、100-105.